

貝が法定通貨？！

～東ニューブリテン州のタブについて～

泉 留維（いずみ・るい）

1995年頃からパプアニューギニアの東ニューブリテン州のラバウル県近辺（トーライココミュニティ）を中心に、伝統的に使用してきた貝貨タブが、パプアの法定通貨であるキナと並行して使用されるようになった。ラバウル県政府が、儀式などの際の互酬的な使用に限られてきた貝貨を法定通貨の1つとして認め、その後州政府がフォーマルセクターでの使用を認めたのである。タブは、伝統的に鼻を中心に両手を広げた長さ（約1.8m）を基本に計られ、貝殻が数珠繋ぎになっているものである（貝殻2枚で1cmを目安、300～400枚の貝殻からなっている）。

図1：ニューギニア地図

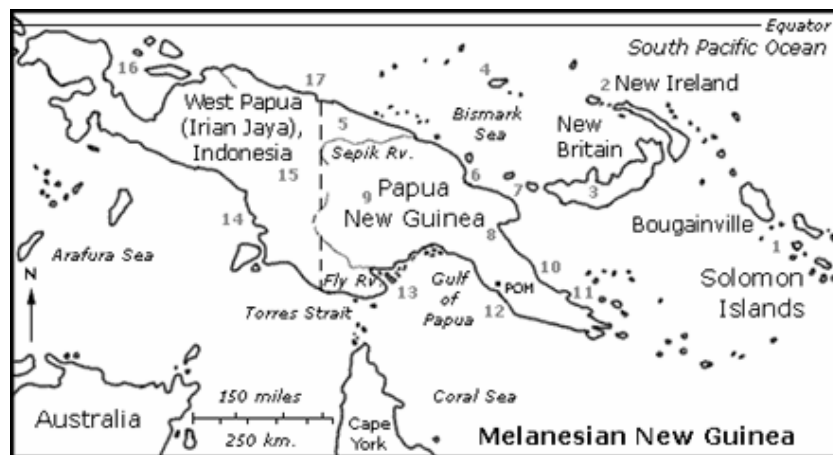


写真1：6フィート（約1.8m）ある貝貨（ソロモン諸島で使用されているもの。冠婚葬祭など儀式のときに使われる互酬用貨幣。タブもほぼ同じ形）



（出所）<http://www.art-pacific.com/>

東ニューブリテン州のラバウル県で90年代後半に貝貨タブを扱う銀行が設立され、預貸業務やキナとの交換業務が行われるようになった。また、タブは、1996年にまず東ニューブリテン州のバラナタマン県において刑事罰における罰金や人頭税、授業料などに使用することができるようになり、2000年後半頃からは州内のほぼ全域でタブが使用されるようになりフォーマルセクターでの使用領域は大幅に広がっている。2001年1月現在、キナの対ドル価値が下落し続けているためか、それにつられて当初タブ1本が4キナであったのが2~3.5キナの価値になっている(2001年1月で1キナ=0.35USドル、2002年6月28日現在で1キナ=0.26USドル)。現在、東ニューブリテン州全体で推定800万キナ相当(約2億5000万円)のタブが出回り、市場や商店で普通に使用することができる。

このような貝貨が法定通貨になった背景には、パプアニューギニアの経済不況と密接に関係している。キナの対ドル価値が急激に下落し、また同時に東ニューブリテン州で1994年に火山噴火が起き、中小零細企業や商店、元来キナ収入が少なかった零細農家は深刻なキャッシュフロー問題に直面し、他に選択肢がなくなったためインフォーマルで使用していた貝貨を正業に組み入れざるを得なくなった。同時に、キナの税収も激減した地方政府もまた貝貨を受け入れざるを得なくなったのである。沈滞した経済の中で生き残る手段として自然と使用が始まったとも言え、東ニューブリテン州では最近、公式にキナとタブの二重通貨システムを採用するという宣言が準備されつつある。ラバウル県政府では、このタブは退蔵されることなく人々の消費意欲を刺激していると言い、高く評価している。

貝貨のような伝統的な貨幣は、世界規模の市場経済がローカルな経済秩序に浸透していくに従いその姿を消していくというのが今までの定説であったが、この東ニューブリテン州では全く違う展開を見せつつある。つまり、市場経済の下で使用されていた法定通貨キナが経済危機の中で伝統的な貨幣にその役割を浸食されているのである。このタブの価値を支えているのは、今まで使用してきたインフォーマルセクターでの人々の信頼であるなら、グローバルマーケットでの影響を受けるキナよりも地域の経済社会の発展に寄与する可能性を持っているであろう。

(2002年6月28日)

< 主な参考文献 >

Wesley Bunpalau "Shell money may save LLG", *Islands Post*, Tuesday 14th August, 2001

"Money - Traditional Tolai Tabu", <http://www.michie.net/pnginfo/monitabu.html>

"EAST NEW BRITAIN PROVINCE MAY APPROVE TRADITIONAL SHELL MONEY AS LEGAL TENDER", *PACIFIC ISLANDS REPORT*, 1999

Liz Thompson "Shelling out: Official currency is challenged in Papua New Guinea", *Pacific Islands Monthly*, 2000